

地域で受け継がれている災害伝承の特性と 災害教訓誌の開発の実践

石原 凌河¹・松村 暢彦²・藏重 良紀³・加藤 佑昌⁴・西田 拓亮⁵

¹学生会員 博士後期課程 大阪大学大学院工学研究科 (〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1)
E-mail:r-ishihara@mit.eng.osaka-u.ac.jp

²正会員 准教授 大阪大学大学院工学研究科 (〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1)
E-mail:matumura@mit.eng.osaka-u.ac.jp

³博士前期課程 大阪大学大学院工学研究科 (〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1)
E-mail:y-kurasige@mit.eng.osaka-u.ac.jp

⁴博士前期課程 大阪大学大学院工学研究科 (〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1)
E-mail:y-kato@mit.eng.osaka-u.ac.jp

⁵博士前期課程 大阪大学大学院工学研究科 (〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1)
E-mail:h-nishida@mit.eng.osaka-u.ac.jp

東日本大震災の教訓として、減災の観点から、自然災害の教訓や知恵を伝承することの重要性があげられる。空間的に自然災害を制御するハード整備や、地域性を越えて、防災の側面を前面に打ち出して戦略を図っていくことは、想定外の自然災害に対処できないと思われる。自然災害と向きあいながら、こうした知恵や経験を集落内の共有知として伝承し、後世に災害の教訓をいかすことで、災害に対処できる集落が構築できるのではないかと考える。そこで本稿では、地域内で受け継がれている災害伝承に着目し、その内容の特性について考察するとともに、地域内で災害伝承を広めるために、災害伝承を行うことの効果の把握や、災害教訓誌の作成の実践とその評価を行い、災害伝承を地域内で広める意義について考察した。

Key Words :disaster oral tradition, the magazine of the lesson about the disaster,disaster culture,disaster reduction

1. はじめに

(1) 研究の背景・目的

東日本大震災の教訓として、減災の観点から、自然災害の教訓や知恵を伝承することの重要性があげられる¹⁾。実際、東日本大震災で多大な被害を受けた岩手県宮古市田老地区では、高さ 10mの防潮堤が市街地を取り囲む形で築造されていたが、その防潮堤を越えて津波が市街地を押し寄せ、防潮堤の依存による安心感から多くの市民が逃げ遅れてしまい、多大な被害をもたらしたと報告²⁾されている。その一方で、三陸地方で昔から言い伝えられている「津波でんでんこ」という教訓が岩手県釜石市を中心に児童に広く伝承されており、東日本大震災発生時には児童の多くがその教訓を実践し、釜石市の小中学生の犠牲者はほとんど出なかったと報告²⁾されている。また、東日本大震災の復興への提言¹⁾でも、災害伝承の重要性が記載されている。

東日本大震災による被害を免がれた地域においても、今後 30 年以内に東海・東南海・南海地震や首都直下型地震等が極めて高確率で発生すると言われている³⁾ため、起こるべく自然災害に備えることは全国共通の課題だと言ってもよい。

以上から、空間的に自然災害を制御するハード整備や、地域性を越えて、防災の側面を前面に打ち出して戦略を図っていくことは、想定外の自然災害に対処できないと思われる。自然災害と向きあいながら、地域で蓄積された災害にまつわる教訓や知恵を地域資源として捉え直すとともに、こうした知恵や経験を集落内の共有知として伝承し、後世に災害の教訓をいかすことで、災害に対処できる集落が構築できるのではないかと考える。

そこで、本稿では、地域内で受け継がれている災害伝承・被伝承の内容を分析・考察するとともに、こうした災害伝承を地域内で共有するための取り組みとして、災害伝承の聞き取りや災害教訓誌の作成の実践とその評価

を行い、災害伝承を地域内で広める意義について考察する。なお、本稿で対象にする伝承は、家族間や住民間での口頭による伝承に焦点を当てる。

(2) 既往研究のレビューと本研究の位置づけ

災害伝承に着目した研究として、金井ら⁴⁾の研究では、親子間での津波に関する知識の伝承の実態に着目し、その伝承実態と、それを広める取り組みとして学校での防災教育の提案を行っている。また、松尾ら⁵⁾は、四国に伝わる災害の言い伝えから、家族・地域で対応できる災害の知恵となる要素の抽出を試みている。

本稿では、地域内で受け継がれている災害伝承・被伝承の内容を分析するとともに、地域内で災害伝承を広げる取り組みとして、災害伝承を行うことの効果を把握するとともに、災害教訓誌を作成することの実践とその効果について考察するといった実践的研究として位置づけられる。

(3) 研究の方法と構成

第2章では、研究対象地域の概要について述べるとともに、文献から過去の災害の被害状況について述べる。第3章では、アンケート調査により地域で受け継がれている災害伝承の内容を類型化し、その特性について考察する。第4章では、ヒアリング調査で抽出した地域で受け継がれている災害伝承から、地域の災害教訓をまとめた試みについて述べるとともに、過去の災害経験や知恵について伝承する効果について考察する。第5章では、地域内において災害伝承を広める取り組みとして地域の災害教訓誌を作成し、災害教訓誌の配布者による感想から、災害教訓誌を通じた地域内で災害伝承の意義について考察する。第6章では、本稿の総括と、第2章から第4章で得た知見を踏まえて、災害教訓誌を通じて災害伝承を広める意義について考察する。

(4) 用語の定義

本研究で扱う用語として、以下のように定義する。

① 直接経験

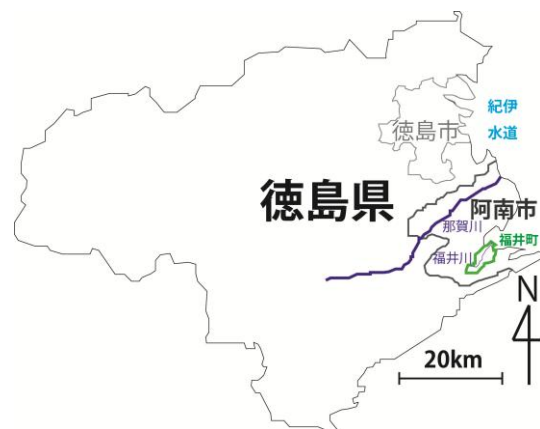
過去の自然災害について、自宅や個人等に対して直接的な被害を受けたことがある。

② 伝承経験

過去の自然災害の経験や教訓を誰かに伝えたことがある。

③ 被伝承経験

過去の自然災害の経験や教訓を誰かから聞いたことがある。



図－1 研究対象地域の地図

2. 研究対象地域の概要

本稿で対象とした徳島県阿南市（図－1）は、昭和南海地震・1960年のチリ地震等による津波の浸水被害を度々受けている。阿南市史から、昭和南海地震・1960年のチリ地震の災害記録を抽出した⁶⁾。昭和南海地震は、昭和21年12月21日午前4時19分に、紀伊半島潮岬沖を震源として発生し、潮岬南方沖を震源とした、マグニチュード8.0の規模の大地震で、南関東から九州全域にかけて地震による津波の被害を受けた。阿南市における地震の揺れによる被害状況は、津峯神社社務所と隣接店舗が倒壊により、神社職員一人が圧死したと記録されている。また、昭和南海地震による津波の被害は、大手海岸の防潮堤21ヶ所が決壊し、椿町では椿川沿いに海水が遡上し、椿小学校北東200m付近まで浸水したことや、福井町では福井川沿いに海水が遡上して、大宮の神宮寺でも前の石垣まで浸水したといった記録が残されている。1960年のチリ地震（以下、昭和チリ地震）は、昭和35年5月23日午前4時11分（日本時間）に発生し、チリを震源とした、マグニチュード9.5という巨大地震である。日本では、地震による津波による被害を受け、約1日かけて太平洋を横断して、太平洋側を中心に、全国で死者・行方不明者139人、家屋全壊1571戸などといった甚大な被害を出した。阿南市においても、床上浸水860棟、床下浸水332棟という被害が報告されている。特に深刻な被害を受けた橋町では、全町の約75%が被災し、約50%は床上浸水で災害救助法が発動される事態となった。また、福井町大原地区では、約5mの高さの津波があったという記録が報告されている。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災においても、徳島県全域で3m以上の津波の襲来が予測される大津波警報が発生され、住民の避難が促された。徳島県阿南市橋町鵠で3.5m、福井町湊地区では3.4mの津波が到来し、湊地区では1軒の床上浸水の被害が発生したことが報告されている⁷⁾。今後も、東海・東南海・南海の3連動による巨大地震による甚大な津波被害を受けることが予測

3)され、早急な地震・津波対策を行う必要が求められている。

津波だけでなく、風水害による被害も頻発している。西部の四国山地に連なる山間地、紀伊水道、太平洋に面する海岸地帯より構成され、市内には急流的那賀川及びその支川が流れ、台風、豪雨等の影響を受けやすい自然条件を有している。表－1に、第二次世界大戦以降に阿南市で被害を受けた風水害と、その被害状況を阿南市史から抽出したものを示している。ここ10年の風水害の被害状況を見ると、死者は出なかったものの、被害が発生した風水害が10回発生し、台風や集中豪雨による床上浸水が計109戸、床下浸水が計425戸の被害を受けていることがわかる。



図－2 研究対象地域の様子

表－1 ここ20年における風水害の発生状況

原因	発生日月	主な被害の状況
台風10号	2003.08.09	市内の吉井などで5地区約130.8haが浸水
台風6号	2004.06.19～06.22	市内で床上浸水55戸、床下浸水149戸
台風10号	2004.07.31～08.01	細野町で土砂崩れ、床下浸水5戸
台風16号	2004.08.27 08.28	床下浸水1戸
寒冷前線	2004.09.01	徳島市・阿南市を中心に32,300戸が1日停電
台風23号	2004.10.20～10.21	床上浸水42戸、床下浸水98戸
台風14号	2005.09.06～09.07	加茂町、吉井町で避難勧告発令
低気圧	2007.07.10～07.11	集中豪雨により椿泊地区で床上浸水2戸、床下浸水6戸
低気圧	2008.04.10	集中豪雨により新野地区で床上浸水2戸、床下浸水100戸
低気圧	2008.06.29	集中豪雨により福井地区で床上浸水8戸、床下浸水66戸

3. 災害伝承の抽出と類型化

(1) 概要

本章では地域で受け継がれている災害伝承・被伝承の内容について分析・考察を行う。災害伝承や被伝承の抽出方法については、アンケート調査により災害伝承・被伝承の内容を記述してもらう形式をとった。

アンケート調査では、阿南市の中でも、特に自然災害の被害をこれまで受けてきた阿南市福井町を対象に実施

した。アンケートの配布は、阿南市福井町に属する全自主防災組織の代表者による託送を行い、全戸配布した。なお、福井町に18団体ある自主防災組織は、阿南市福井町の全住民が加盟している。配布は2011年12月5日に行い、回収締め切りを2011年12月16日とした。配布にあたっては、家族の代表者だけでなく、なるべく多くの世代が記入してもらえるように、各家庭に2部ずつ配布した。その結果、1520部（760世帯）配布し、有効回答数は430部（234世帯）、有効回収率は28.3%となった。アンケート調査により、回答者の個人属性と、伝承に関する項目として、昭和南海地震、昭和チリ地震、風水害の伝承経験・被伝承経験の有無、伝承・被伝承内容を把握していた。

(2) 回答者属性

表－2でアンケート回答者の個人属性を示している。女性よりも男性の回答者がやや多く、60歳以上の回答者が最も多いものの、福井町の高齢化率が32.37%（2010年国勢調査の数値）を考慮すると、偏りが少ない数値である。職業は主婦・パートが最も多く、次いで、自営業となっている。居住年数は50年以上の割合が最も多く、10年未満の割合が最も少ないことから、地域内の流出入が少ない地域であると言える。

表－2 回答者の個人属性

属性項目		度数	割合	属性項目		度数	割合
性別	男性	222	54.7%	職業	会社員・公務員	92	22.7%
	女性	184	45.3%		自営業	95	23.5%
年齢	29歳以下	14	3.2%		主婦・パート	160	39.5%
	30歳代	18	4.2%	居住年数	無職	58	14.3%
	40歳代	43	10.0%		10年未満	37	9.6%
	50歳代	77	17.9%		10年-20年	41	10.5%
	60歳代	155	36.0%		20年-30年	45	11.5%
	70歳以上	102	23.7%		30年-40年	46	11.7%
					40年-50年	46	11.7%
					50年以上	177	45.2%

(3) 地域で受け継がれている災害伝承の内容

アンケート調査で抽出できた過去の災害伝承・被伝承内容をKJ法により分類すると、「地域に関する内容」、「家庭や日常生活に関する内容」、「資源に関する内容」の3つの大項目にすることができた。また、小項目として、11項目に分類することができ、そのうち、地域に関する内容が3項目（地域特性を踏まえた避難行動やその経験から得られる教訓、地域で被害を受けている様子やその経験から得られる教訓、被災後の地域の様子やその経験から得られる教訓）、家庭や日常生活に関する内容が2項目（被災後の家庭の様子やその経験から得られる教訓、家庭で被害を受けている様子やその経験から得られる教訓）、資源に関する内容が3項目（資材を活用した被災後の生活の様子やその経験から得られる教訓、資材を活用した避難行動やその経験から得られる教訓、資材の被害状況やその経験から得られる教訓）、それ以外の3項目（災害の側面のみを考慮した教訓、災害の描

写や被害状況、その他)に分類することができた。そこから、各災害の伝承・被伝承別に分類毎に内容をあてはめていき、その合計数を把握した。表-3では、アンケート調査で抽出できた分類毎の災害の伝承・被伝承の内容例を最大3つまで原文のまま示している。また、内容の下に記載している数値は、アンケート調査の回答数を示している。重複する内容については、どちらの項目にも計上した。

いずれの災害の伝承・被伝承の内容においても、「津波の高さとか恐ろしさを聞いた。」といった災害そのものの描写や、「遠い所で起きた津波でも影響を受けるといこと。」といった災害の側面のみを考慮した教訓などの災害について全面に打ち出した内容については、「地域に関する内容」、「家庭や日常生活に関する内容」、「資源に関する内容」よりも回答数が少なかった。すなわち、災害そのものの教訓や恐ろしさは伝承されにくく、地域や生活、資源と関連した内容が伝承されやすいことが言えるだろう。

地域に関する内容をみると、「地域特性を踏まえた避難行動やその経験から得られる教訓」については、主に津波の来襲の際の避難行動に関するものが多く、風水害に関する内容はなかった。「地域で被害を受けている様子やその経験から得られる教訓」については、津波よりも風水害が多く、「大雨の時は、水路に近づかない」といったように、地域の被災経験から得られた教訓や、「大雨が降ると、家の周辺(道、田んぼ)が水に浸かってしまう。」といったように、風水害については、被害状況等が特に多いことがわかる。昭和南海地震や昭和チリ地震の津波に関しても、同様の伝承・被伝承の内容が多いことがわかる。「被災後の地域の様子やその経験から得られる教訓」については、風水害よりも津波に関するものが多く、特に風水害の被伝承に関するものはなかった。特に津波の伝承・被伝承内容では、「木造船が水田に流れてきた。」、「田んぼで魚がういていた。」、「橋湾で養殖されていた真珠が田んぼに流れ込んできた。」といった日常生活では考えられない状況についての描写が多いことがわかる。

家庭や日常生活に関する内容をみると、「被災後の家庭の様子やその経験から得られる教訓」については、「震災後の家の中の様子について、ガランとして何もなくなった様子について話した。」といった震災後の日常生活の描写や経験についての内容だけでなく、「日頃、仕事に来てくれた人が、納屋の片付けに駆けつけてくれた。」といった共助のありがたさや、「他からの応援がなく、しばらくは自力で頼らざるを得ない状況だった。」といった自助の必要性が訴えた教訓も内容もみられた。「家庭で被害を受けている様子やその経験から得られる教訓」については、津波・風水害ともに「1階の半

分以上が水がきた。」といった津波や大水が自宅内に到達した場所についてや、「壁が傷んだ跡が残った話から津波の恐ろしさを聞いた。」といった家屋の被害状況についての内容が多いことがわかる。

資源に関する内容をみると、「資材を活用した被災後の生活の様子やその経験から得られる教訓」については、昭和南海地震についてのみ項目があった。内容をみると、「お米をもって避難し、にぎりめしを作って、みんなで2日位しのいだこと。」といった資材を活用した避難生活に関する内容だった。その理由として、昭和南海地震当時は、非常持ち出し品や非常食が現在ほど普及せず、避難生活で苦労したからだと考えられる。「資材を活用した避難行動やその経験から得られる教訓」については、昭和南海地震の被伝承については項目はなかった。「家屋はどうにもならないので、車は高台に移動している。」といった過去の災害経験から得られた事前対策の教訓や、「避難途中、家財を取りに帰って、流されたものが多くいたらしい。」といった避難の際の教訓が多いことがわかる。「資材の被害状況やその経験から得られる教訓」については、各災害の伝承・被伝承内容ともに合計数として多くはないものの、「春作のトマト、キュウリ等の畑が海水に浸かった。」といった農作物の被害状況等に関するものがみられた。

以上から、地域で受け継がれてきた災害伝承・被伝承は地域、家庭や日常生活、資源と密接に関係しているものが多いことが把握できた。防災・減災を日常生活や地域特性等の延長線上に位置づけたものとして、矢守は、「生活防災」を提唱している。生活防災とは、「生活総体に根差した、防災・減災実践のことであり、生活文化として定着した防災・減災の基本原則」と定義⁷⁾されている。矢守は、これまでの防災施策や技術の意義は認めるものの、地域性や財政といった外部要因を考慮せずに、普遍的な理論から法則や最適解を導き出すスタイルがとれていたものが多く、専門家や行政に安全を委ねることによる安心感の確保により「正常化偏見」といった心理的バイアスが生じてしまい、防災意識の醸成につながら多いと指摘⁸⁾している。また、石原ら⁹⁾は、矢守が提唱した生活防災を基に、生活防災意識を「地域での生活防災」、「資源の生活防災」、「家庭での生活防災」と3つの因子から構成されていることを明らかにした。

抽出した災害伝承は、「地域に関する内容」、「家庭や日常生活に関する内容」、「資源に関する内容」に分類することができたが、これらは「地域での生活防災」、「資源の生活防災」、「家庭での生活防災」と対応できるため、地域で受け継がれている災害伝承の多くは生活防災の理念と一致しているものが多いと言える。

表の上段に示し、教訓の根拠となったヒアリング調査から得られた災害伝承の内容を下段に括弧書きで示した。成果報告会（図－3参照）では、前節で抽出した災害経験や伝承・被伝承の内容を地図上に示し、それを基に参加者間で内容を共有化した。

(2) 災害伝承の効果の検証

災害伝承の効果を検証するために、参加者からアンケート調査を実施した。表－5に成果報告会の参加者の個人属性を示している。60歳代が一番多く、次いで70歳以上と、高齢者の参加者の割合が高いものの、研究対象地域の高齢化率が32.37%（平成23年度国勢調査より）であることから、偏りのない数値であると言える。



図－3 成果報告会の様子

表－4 福井町の災害教訓7ヶ条

1	昔の生活をもう一度見直してみる （昭和南海地震の時は井戸水と薪で火をおこして過ごしていた）
2	地域の地形や特性を日頃からよく知っておく （大きな地震が来たら裏山へすぐに逃げる）
3	避難路や避難場所に日頃から慣れ親しんでおく （地神社では今も相撲をとっている）
4	山を大切に日頃から管理しておく （昔はよく裏山でタケノコを掘りにいっていた）
5	過去の災害の経験を日頃から地域で伝えあっていく （おばあさんから昭和南海地震当時の様子を聞いたことがある）
6	水の恐ろしさを知ると同時に、水に慣れ親しんでおく （昔は湊地区に大きな貨物船が行き来していた）
7	災害時には家族だけでなく親戚や知り合いとも連絡をとれるようにする （東日本大震災の時は近所のお宅に避難させてもらった）

表－5 成果報告会参加者の個人属性

項目	カテゴリ	数値
性別	男性	26(78.8)
	女性	7(21.2)
年齢	30歳代	1(3.0)
	40歳代	2(6.1)
	50歳代	3(9.1)
	60歳代	18(54.5)
	70歳以上	8(24.2)
	未回答	1(3.0)

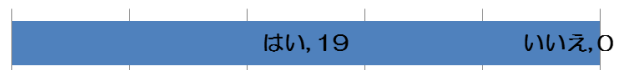
また、図－4に参加者におけるヒアリング調査の参加者の数を示している。33名の参加者のうち、19名がヒアリング調査の対象者という結果になった。

アンケートの設問は、防災意識に関する既往研究¹⁰⁾を参考にした。ヒアリング調査の対象者と答えた人(19名)のうち、ヒアリングの実施した日から報告会までの間で、①家族や友人との災害や防災に関する会話の有無、②防災対策の見直しや追加、③ハザードマップの入手の実施の有無を聞いている。図－5に、アンケート調査の単純集計を示している。

家族や友人との災害や防災に関する会話については、回答者の全員が行っているという結果になった。また、19名中16名が家庭での防災対策の見直しや新たに実施したと回答し、14名が防災に関する地図を調べたり入手したという結果になった。

以上のことから、地域内で過去の災害経験や知恵を伝承する効果として、過去の災害経験を想起する機会となり、そのことが、これまで取り組んできた防災対策について振り返り、防災対策を見直したり、新たに追加する機会となることが把握できた。

家族や友人と災害や防災に関する
会話をしましたか？



家庭での防災対策を見直したり、
防災対策を新たにしたりしましたか？

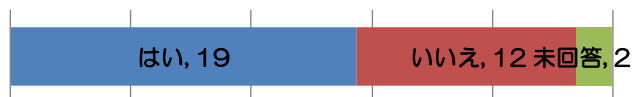


ハザードマップ・防災マップ等を
自分で調べたり、新たに入手しましたか？



図－4 聞き取り調査への参加の有無

聞き取り調査に参加しましたか？



図－５ ヒアリングによる防災意識・行動の変化の有無

5. 地域災害教訓誌の作成とその評価

(1) 概要

前章で述べたヒアリング調査で抽出した地域で受け継がれている災害伝承の内容や、「福井町の災害教訓 7 ヶ条」（表－4 参照）を基に、地域の災害教訓誌（図－7 参照）を作成した。冊子は、持ち運びしやすいように、A4 サイズを両面印刷したものを 8 つ折りにした。表面では、聞き取りの対象とした昭和南海地震・昭和チリ地震の概要、生活防災の重要性、教訓の作成意図について明記した。作成意図では、単に災害経験を伝えるだけでなく、災害伝承を通じて日ごろの生活が豊かになることを強調した。生活防災の重要性については、生活防災で重要な観点である、「近所づきあいの大切さ」、「地域の様子をよく知る」、「普段の生活を大切にする」ことの重要性について記載した。裏面では、前章で述べたヒアリング調査により抽出した昭和南海地震、昭和チリ地震における災害伝承の内容を一般化せずに、そのまま記載した。災害の教訓誌は、研究報告会（2012 年 3 月 5 日）を開催し、その参加者に配布し、災害教訓誌を閲覧した感想を自由記述によって伺った。

(2) 感想

災害教訓誌を閲覧した全感想を分析し、地域で受け継がれてきた災害伝承を広めるための災害教訓誌の有用性について考察する。図－6 に災害教訓誌を閲覧しての全感想を示している。感想については、否定的なコメントはなく、おおむね有益であったと読み取れる。感想の内容を見ていくと、「自分自身も災害のことについて、少しずつ理解ができました」等のように、教訓誌を通して防災や災害の意識の醸成へのつながりを認識した意見が寄せられていることが把握できた。また、「普段の生活が防災に結びつくとうわかったこと災害文化の伝承の大切さがよくわかる。」等のように、普段の生活が防災とつながっていることを認識したという意見も寄せられていた。「福井町民同士の（地域）もっともっと話し合いが必要だと思いました。」というように、防災意識だけでなく、教訓誌をきっかけに地域への関わり方を見直そう

という意見もあがっていた。さらに、「生活防災についての認識を新たに考えることの大切さを知らされた」というように、生活防災の重要性に気づくことができたという意見も多かった。

以上から、災害教訓誌は、防災意識の醸成だけでなく、生活防災意識や、地域への関わり方を見直すきっかけにつながることを示唆された。その理由として、過去の地域の様子を昔の生活を想起したり、災害時のリアリティの想像を巡らすことができ、現在の地域の姿や生活行動と比較しながら、地域や家庭での災害のあり方を考える機会となるからだと思われる。

- ・福井町民同士の（地域）もっともっと話し合いが必要だと思いました。
- ・私達ができる事、近所の人と仲良くしたり、井戸水を大切にしたり、薪を作って置く事に努力します。2 年前に台所をリフォームしましたが、昭和 43 年の大雪の時の停電を考えてガスにしました。
- ・過去における津波等を体験した文、当時の生活文化が良くわかりました。災害を知ってあらたなる対策こそが人間としての文化の前進だと思います。
- ・従来見聞きして来たことが生活防災につながる事に改めて感じた。
- ・日々の防災対策の向上に非常に役に立つ内容であり、ふまえて、もう一度考え、今年度の防災マニュアル作りに役立てたいと思います。詳細な研究ご苦労様でした。今後も引き続き防災の知恵を提案して下さい！
- ・初めて出席させていただいたのですが、もう一度、家族・子供・孫達に今まで以上に勉強させたいと思いました。
- ・災害について大変くわしく説明をしていただいて自分自身も災害のことについて、少しずつ理解ができました。大変ありがとうございます。
- ・普段の生活が防災に結びつくとうわかったこと災害文化の伝承の大切さがよくわかる。
- ・各地域にて災害文化の伝承について、市民に報告することにより、全国の人、誰もが生活防災について関心を持ち、防災に対する意識が高まると思います。家へ帰ってから研究内容に通すことができるしこの資料は大切にしたい。
- ・災害の教訓を生かした生活防災の意識の構築が重要であると再認識した。
- ・生活防災についての認識を新たに考えることの大切さを知らされた。
- ・東日本大震災から 1 年が過ぎ、当時よりは防災意識が少しうすれている中、一歩ふみこんだ（生活防災等）内容で、地元ではなく、ちがった目線の福井町が見え、もう一度防災対策を考えなおす、防災に関する話ができて、防災意識がたもていけるのではと思います。
- ・地域防災のレベルアップをはかっていくためのいい資料なので、おおいに活用させていただく。

図－6 災害教訓誌の全感想

「生活防災」の大切さ

阿南市は過去の災害で大きな被害を受けました。その被害は数字だけでは実感がありません。自分たちが暮らしている地域の人の体験を聞くことによって、はじめて災害の怖さを感じることが出来ます。そうすることで災害の時の自分の取るべき行動を本気で考えるようになります。

また、多くの体験談は、その地域の人々が日ごろから助けあって生活してきたからとることができた行動です。普段から真に豊かな生活を行うことが防災にも役に立つことがわかります。これを生活防災といいます。



ご近所づきあいを大切にする

過去の災害時にはご近所で助け合って逃げたり、避難生活を行って来ました。日ごろから地域の人たちと声をかけあったり、一緒に地域の活動を行ったり、ご近所づきあいを大切にすることで、いざというときに地域の人が生き残るのに力を発揮します。

地域の様子をよく知る

以前は地域で働き、生活をする人がほとんどでした。最近では住むところと働くところが別で、地域のことをよく知らない人が増えています。地域の様子をよく知り、危険な箇所を頭に入れておき、あらかじめ避難場所や順路を決めて確認しておくことが大切です。

普段の生活を大切にする

以前は裏山に食料を備蓄したり、家族で家の仕事を分担するなど普段から災害や避難時にも備えた生活を自然と行っていました。こうした観点から普段の生活を見直し、たとえば、備蓄するもの、非常時に持ち出すものを用意したりすることが大切です。

昭和南海地震

1946年（昭21）12月21日4時19分に、瀬戸内海で震源とするマグニチュード8.0の南海大地震が発生し、南西日本一帯では地震動、津波による大きな被害が発生しました。全体の被害は死者1,330人、全壊11,591戸、徳島県では死者202人、住家流出413戸、全壊602戸、堤防決壊40カ所での大きな被害がました。

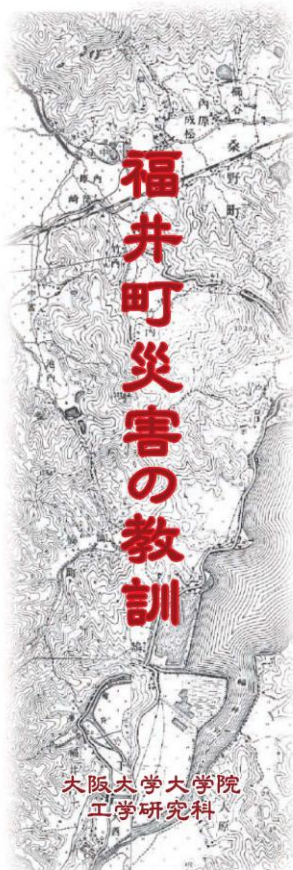
橋浦での津波は、地震後20～25分で引かずには第1波がやってきて、約30分の間隔を置いて7回程きました。第2波が最大で、民家の8割以上浸水しました。津波の高さは湾口1.90メートルでしたが、湾奥の福井川河口では3.63メートルもありました。橋浦の被害は、全建築物数1,290戸のうち、流失が50戸、全壊が53戸、半壊が196戸、床上浸水が867戸、床下浸水が66戸にのぼりました。

チリ地震津波

1960年（昭35）5月22日にチリ沖で発生、有史以来観測された中で最大規模の巨大地震です。チリの裏側の日本では津波による被害が大きく、地震発生から22時間半後の5月24日未明に太平洋岸に津波が来ました。全体で死者139人、全壊1,571戸の被害が出ました。

橋浦、後戸浦、梅泊浦には四国東岸において最大の津波が押し寄せていて、1,299戸が浸水しました。なかでも橋浦では最高4.45メートルに達しました。田畑が海水につかり、真珠の養殖場の被害が5億5千万円に達しました。

（参考）第五管区海上保安部海洋情報部：昭和21年南海大地震調査報告、1947年
建設省国土院：チリ地震津波調査報告書、1961年



何を学ぶのか

むかしにおきた災害から私たちは何を学ぶことができるのでしょうか。

今から66年前、昭和南海地震と津波で大きな被害がでました。このときで私の地域は大丈夫だったから、次の地震でも大丈夫ということはありません。また、昭和南海地震は、それ以前にこの地域でおきた大きな地震と比べやや小さいとされています。だからといって、次の大きな地震には昭和南海地震の経験は役に立たないというわけでもありません。むかしの災害の経験はそのまま信じるのには危険すぎ、役に立たないものとして捨ててしまうにはもったいないと思います。

私たちが暮らしている、この地域の方々が過去の災害時にとった行動を共有することで、災害時はもちろんのこと日ごろの生活をより豊かにしてくれるヒントが隠されています。



昭和南海地震

田舎でいたのでテレビが外だったが、そこで祖母が震えてはげしく叫び続けた様子。実家は高台にあったが遠くから石のクラクラと鳴る音が聞こえていた。人の声と家畜の鳴く声が地獄のごとく聞こえたと聞いています。

父（当時は20歳くらい）動けなくなった人を見ぶって波につかりながら逃げて二人とも助かり、後でお礼にきてくれた。父は祖父を助けようとして、祖母はたいへん心配したそうです。

小学6年生の時、津乃岬で経験した。教科書で学習した稲村の火を思い出して、すぐ家の裏庭へ逃げた。明るくなって山から家へ帰ると津波は床下まで浸水していて、泥水の片付けに困った。

地震の後に津波が来ることをしたのは南海地震の時初めてでした。やっど地震が止まってホッとしたとき、湊の川下のおじさんが「津波が来るぞー逃げたよー」と阿部も阿部も大きな声で川上の方に向かっていって来ました。その声を聞いて私たちは「つなみが来るってうわ、うわの山へ逃げよう」といって裏の山へそそろと登って行ったものです。私は23歳でしたが、そのときまで大きな地震の経験もなく地震の後に津波が来ることも全く知らず、頭がありませんでした。外のおおな達も皆同じようでした。おじさんは船を持って海運業をしていられたので、海のご地震の後の津波のことをよく知っておられたのだと思います。おじさんのおかげでその頃の私たち湊地区のみんなは助かったのだと思います。海がなかつたら、湊地区はものだけの被害ですまなかったらと思うます。

飼っていた牛を置き去りにして戻ったときには、怖かったのかひびいて動けなかった。

津波がきて山に逃げた。飼っていた牛は死んだ。津波は怖かった。

天井から30cmくらいのところまで津波がきた。雲が津波で浮き上がったためダンスが前にたれて、肴物が泥水でぐちゃぐちゃ。雲の上は田んぼの中を歩くように沼が一杯。

津波が現在の農協付近まで小さな船もながされてきた。

義父が米を一俵裏山に担ぎ上げ、そこで近所の人たちと数日過ごしたと聞いています。

お米を持って避難し、にぎりめしをつくってみんなで2日はしのいだ。

皆裏山へ逃げて、竹藪の中で近隣者3〜4軒で竹を切り小屋をつくり共同生活をした。

香川県の小豆島より消防の方が手伝いに来てくれた。またよその地域の方が米の集出荷や交換、かたづけの手伝いをしてくれたそう。

道路まで泥が上ったので、冬なのに裸足で学校に行った。海水でぬれた着物をため池で塩漬して干した。60kgもある米俵を津波の引いている間に担いで高い所に開け、水で洗って干した。

チリ地震津波

「津波がくるぞー」という声が聞こえてあわてて山の上のお寺に逃げた。

自転車で通学していたが、目の前に山のような津波が現れ山へ逃げた。通学途中バスが田にながされ国道が決壊していた。

町で一番高い山に逃げた。人々でこたえ逃げていた。山の上から見ると、津波が引いて前の島が地続きになっていた。小学校で自衛隊配給のおにぎり、服を並べてもらった。

河口の堤防があらこちで崩壊した。田の中にカレイやタコが多かった。

大きなダイが畑へ打ち上げられていた。海岸の土手、松の木がながされて田畑が荒れていた。家、納屋も使って、牛を引出すのがたいへんだった。

高潮かと思ったがみるみる潮位が高く堤防を越え、福井川の堤は決壊した。一面濁流となり船舶が流れ、真珠いかだや木材が流れ込んできた。

中学校の校庭に真珠のいかだが流れてきて潮が引いた後、真珠の玉をたくさんひらった。校庭が川状になり、たこや魚が獲れた。

真珠が田んぼにたくさん流れ込んでいた。家の中の畳がぶかぶか浮いて汚水で阿日も家が臭かった。

春作のトマ、キュウリ等の畑が海水につかった。刈っていた麦が全部流れた。

高校生が学校に行（途中、津波がきて墓地のある高台に逃げたと教えてくれた。

はるか遠くまで潮が引き魚が地面ではねていた。近所の大人ににかられてすぐに高台に避難した。

自宅の下道の道から田んぼが海ようになっていた。バスが橋湾に流されていた。道路修復に自衛隊が来て中学校の校庭に駐屯していた。

カラカラと大きな音がして海水がなくなったら大きな高台になって津波がきた。

橋湾からスライムのような流が見える間に近づいてきた。電線に青のりがぶら下がっていた。家の前で魚がはねていた。

運転手の機軸で乗客が逃げた後で、バスが津波に連れ去られた。

堤防が全部切れ、福井川へ津波がきて池バスが流れていった。

田んぼが全部つかって魚がいた。くわひとつで田を地上げれた。田植えには石が多くて手がいたかった。

朝、家の裏にある水がへド口状になっていた。そのうち道路に水しぶきが上がり津波がきた。あわてて家の中に逃げ込んだ。水かさが増えだんだん増えてきたので、鶏、犬などを手当たり次第、家族で二階に上げた。床上50cmくらいだと思ふ。そのあと阿部も津波がきた。次の津波で流れた材木が海岸近くの小屋を壊していた。

図ー7 災害の教訓誌

6. おわりに

本稿では、地域内で受け継がれている災害伝承・被伝承の内容を分析・考察するとともに、こうした災害伝承を地域内で共有するための取り組みとして、過去の災害経験や知恵・教訓を伝承することの効果の測定や、災害教訓誌の作成する取り組みとその評価を行い、災害伝承を地域内で広める意義について考察した。

地域内で受け継がれている災害伝承・被伝承の特性をみると、災害の側面のみを考慮した教訓や災害の恐ろしさや被害状況といった災害について全面に打ち出したものは少なく、家庭の様子や日常生活、地域特性、資源と関連したものが多いことが確認できた。このことは、生活防災の理念と一致していることから、地域で受け継がれている災害伝承の多くは生活防災の視点に立脚したものであると言える。

災害伝承の効果として、地域内で過去の災害経験や知恵・教訓を伝承することで、過去の災害経験を想起する機会となり、そのことが、これまで取り組んできた防災対策について振り返り、防災対策を見直したり、新たに追加する機会となることが把握できた。その理由として、過去の地域での災害経験や教訓等について話すことができ、災害時のリアリティを想起することになり、そのことが防災意識の醸成につながるためだと考えられる。

以上から、過去の災害経験や知恵・教訓を伝承することは一定の効果があると示すことができたため、地域住民の伝承を促すとともに、地域で受け継がれてきた災害伝承を後世にも受け継いでいくために災害教訓誌を開発した。教訓誌では、災害伝承を通じて、防災意識が醸成されるだけでなく、日常生活が豊かになることを意図して作成した。災害教訓誌の感想から、防災意識の醸成や行動の変化だけでなく、地域への関わり方を見直すことや、生活防災の重要性に気づいた人が多いことが把握でき、地域単位で災害教訓誌を作成することの有用性が確認できた。

このように、地域単位で災害伝承を行い、災害の教訓誌として後世へ伝えるような一連の取り組みは、防災意識だけでなく、生活防災意識や地域への態度の醸成に効果があると思われる。こうした一連の取り組みは、防災のための取り組みという観点だけでなく、防災を通じた地域を良くする活動として意義があると思われる。

今後の研究課題として、災害伝承の効果として、災害伝承（話すこと）の効果について提示したが、一方で、災害被伝承（聞くこと）効果についても同様に効果を検証する必要があると思われる。また、自治会や自主防災組織などが自発的に、地域における災害教訓を抽出し、

それを教訓誌等といった形で伝承を広げていく仕組みを開発・普及していくことが望ましいと考える。

謝辞：本取り組みを実施するにあたり、阿南市役所企画部企画政策課の皆様や、湊地区自主防災会の皆様には大変お世話になりました。記して感謝を申し上げます。

参考文献

- 1) 東日本構想復興会議：復興への提言～悲惨の中の希望～，pp.2，2011
- 2) 竹田徹：「釜石の奇跡」と「田老の備え」，産経新聞社，2011年産経新聞4月23日夕刊
- 3) 南海トラフの巨大地震モデル検討会：南海トラフの巨大地震による震度分布・津波高について（第一次報告），内閣府，2012
- 4) 金井昌信，片田敏孝，阿部広昭：津波常襲地域における災害文化の世代間伝承の実態とその再生への提案，土木計画学研究・論文集 Vol.24，2007，pp.251-261
- 5) 松尾裕治，和田一範，山本基，中野晋：四国に伝わる災害に関する言い伝えからの防災術の抽出と活用に関する考察，自然災害科学，Vol.29，No.3，pp.393-411，2010
- 6) 阿南市：阿南市史 第三巻（近代編），2001
- 7) 気象庁：災害時地震・津波速報，平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震，災害時自然現象報告書2011年第1号，pp.124-126，2011
- 8) 矢守克也：増強版＜生活防災＞のすすめ，ナカニシヤ出版，pp.1-29，2012
- 9) 石原凌河，松村暢彦：生活防災意識の構造に関する研究，日本建築学会学術梗概集（東海）Vol.64，No.4，pp.586-59，2012
- 10) 川崎昭如，吉田聡，佐土原聡：GIS(地理情報システム)を活用したハザードマップの公開・提供が市民の防災意識に与える影響に関する調査研究：横浜市民を対象としたアンケート調査と分析，日本建築学会計画系論文集，NO.569，pp.109，2003